

平成 30 年度 大学教育センター「授業研究」(FD 研修) の記録

本学では、授業改革の一環として授業の可視化を目標の一つに掲げ、大学教育センターを中心に授業研究を実施している。今年で4年目となる。

授業研究という手法は、我が国において明治以来、特に初等・中等教育の現場で積み重ねられており、教員の実践力向上におおいに寄与してきたのであるが、高等教育においても、これは授業改革のための有効な一つの手法である。

専門の壁が高く聳えているなかで、同じ科目を担当する教員同士にとどまらず、異なる科目の授業においてもこれを行い、授業後の検討会等で批評を展開する。そこでは授業者自らの授業課題をフィードバックするだけでなく、学修者実態に関する認識も共有し、各々の授業実践を客観化して、授業改善の方策を探るのである。

本年度は、共通教育科目から「人文地理(2)」、人間文化学科専門科目から「ヨーロッパの歴史と文化2」、資格関係科目から「教職実践演習」の、計3回の授業研究となった。まさに、学科を越え専門を異にする教員が、多様な科目の授業を相互に批評・検証する、刺激的な研修となった。

このような営みを今後も積み重ね、本学の広範な授業改善は進むこととなる。

第1回授業研究会 (第1回 FD 研修)

日時：11月21日(水)2限(10:40~12:10)

場所：1号館01103教室

授業担当者 小原 友行 教授

授業科目名：人文地理(2)

参加者：地主、大塚、中尾、竹盛、劉、Lowes、津田、Tang、記谷、Druissi、Sands、日暮

本授業は、『グローバル・パートナーシップ』を育成する地理学習教材の開発～福山大学共通教育科目『人文地理(2)』の授業を通して～』をテーマとして実践したものである。具体的には、「グローバル・パートナーシップ」の育成に有効と考えられる「相互交流型教材」として、日本人に「アメリカ」を初めて伝えたジョン万次郎と最初の英語教師となったラナルド・マクドナルドの物語を取り上げた、題目「幕末の日米交流物語～ジョン万次郎とラナルド・マクドナルド～」を開発・実践した。授業の主要な目標は、次の通りである。

【知識・技能】(「A型学力」)

・資料やスライドからジョン万次郎とラナルド・マクドナルドの物語に関する知識を抽出することができる。

【思考力・判断力・表現力】(「B型学力」)

・鎖国下の日本ではなぜ万次郎を受け入れたのか、その理由を考え、表現することができる。



- ・鎖国下であるにもかかわらず、幕府はなぜラナルド・マクドナルドから英語を学ばせようとしたのか、その理由を考え、表現することができる。
- ・万次郎とマクドナルドの物語に共通するキーワード（「捕鯨船」「英語」「日米交流」「開拓魂と冒険心」など）の地理的・歴史的背景を考えることができる。

【学びに向かう力・人間性】（「C型学力」）

- ・万次郎やマクドナルドに備わっていた「グローバル・パートナーシップ」という人間性や、今日まで続く文化間交流に興味・関心をもつことができる。

本授業の展開は、受講生が歴史新聞記者となり、時空を超えて、およそ 170 年前の 19 世紀半ばの日本・米国にタイムマシンで移動して、彼ら取材し、それを新聞記事として発信するという設定で行った。具体的には、①作成した「万次郎新聞」「マクドナルド新聞」とスライドを用いた二人の交流物語の紹介、②二人の物語に共通する「キーワード」（例えば、「捕鯨船」「英語」「日米交流」「冒険心」など）の発見とその地理的・歴史的背景の熟考、③幕末の日米交流物語に関する「はがき新聞」の作成と交流という、3つの活動を中心に展開した。

第1回授業研究検討会まとめ

日時：11月21日（水）12:15～13:00

場所：学修支援相談室（1号館 01322 室）

参加者：小原、大塚、中尾、竹盛、劉、Loves, Tang, 記谷、日暮

授業者：福山大学の学生に伸ばしたい力と課題であると考えていることがあり、それをアクションリサーチのやり方で行っている。ただ単に知識として知っているだけではなく、背景を考え、表現でき、同時に学びへの意欲が高まっていくという学生を育てたいと考えている。それが地理教育の中でどうかできるかとか考えたときに、教材を用意するということと、アクティブに学んでいくために、新聞を取り入れた。新聞を読み解くということ、それから自分の意見を考え、新聞で表すということを 1 コマの中でやろうとすると、はがきくらいの大きさならできるのではなかろうか、いろいろ楽しみながら考えており、その中で意見や考えを表現できるという力がつけばよいと考えてやっているが、そんなに成果が劇的に上がっているというわけではない。とにかくペアでもなかなか話さない。特に共通教育で学部が違うので、なかなか話さない。アメリカでやるとグループセッションをやるとすれば、すぐやるが、日本の場合はそれができない。受講生が 100 名を超えるとなかなか難しいが、アメリカであれば、あのくらいの人数だと二人くらいの院生が TA としてつくのだが、それもないとなかなか難しい。とにかく楽しみながらやっている。



観察者：物語の中でやっている。覚えやすいのではないかな。

授業者：今回のジョン万次郎は、完成していないので、どのように持っていったら、学生に興味を持ってもらえるのかと考えている。かなり成功しているのは、赤毛のアンの世界とピーターラビットでの世界で人文地理で教えている。赤毛のアンは浸食されている島の話で、ピーターラビットは氷河地形の話である。ジョン万次郎は、まだ教材開発の途中であり、マクドナルドは特に日本で認知されていない。物語の教材を用意することで学生に伝わればよいと考えている。私の授業ではストーリー性のある教材を用意するというを基本にしている。

観察者：歴史的なストーリーだけではなく地理なので、世界地図を使用して線を引いていたが、2 人いるので、色を変えたら面白かったのではないかと。ストーリーが素晴らしいということだけではなく、日本や広島、綿など関連付けして、自分に近い話をしているところに注目した。

授業者：普段は、話が脱線することが多くなってしまふ。

観察者：知らないことがたくさんあり、勉強させていただいた。地理という出発点であるが、ストーリーという文学性も関わっている。葛藤が面白いと思った。その葛藤のところで設問されている。西側からだけでなく、中国との関係など、地理の問題でもあり、歴史的な問題でもある。世界を変えていくのは集団ではなく、一個人である。それが一人ではなく、もう一人に繋がっていく。個人の力は大きいと改めて感じた。

観察者：授業の準備にかけられている時間と意思に感心させられた。もう少し知的な好奇心や知識のある学生がいればいい。本学の学生に考えさせるのは、時間が制限されている中で難しいのでは。関心を持ったと思われるところでは静かになっていた。授業の最初と最後に姿勢を正させるのはいい方法だと感じた。

授業者：以前、起立、礼と号令をしていたが、体の不自由な学生がいて変更した。また、教室環境も重要である。人数の大きい教室では私語が多くなる。理想的には 20~30 人がいいのでは。深い学びをどうするかということが課題である。座席の配置も問題である。共通教育科目なので、学部がバラバラである。いろいろな学部の学生がいるので、どうしても深くならない。専門科目であれば、もう少し切り込んでいくのであるが。学生の間を見て回って、アドバイスをし、発表できそうな学生を選んでいる。指名しても拒否する学生も結構いる。

観察者：発表した学生の声が聞こえなかった。難しい言葉はホワイトボードに書いてはどうだろうかと感じた。

観察者：やさしい日本語でわかりやすかった。学生に考えさせる授業であった。このレベルであれば大学院生の方がもっといいかもしれない。発表者がいないことはあるのか？

授業者：しょっちゅうある。この点、中学校やアメリカでは手が挙がる。しかし、書いたものを発表するとなると、アメリカでも結構抵抗があるようだ。そういう場合は、私が説明をしている。今日発表した学生は、「異文化理解」というタイトルであったので、考えていることがあるだろうと指名した。最初は字も小さかった。段々慣れてきているが、それでも名前だけ書いて提出している学生もいる。

観察者：新聞を書けない人もいると思うが、どう評価しているのか。

授業者：イラストでもよいと言っている。20 分考えて 1 行という学生もいる。待つてあげないといけないし、これのみで評価しているわけではない。

観察者：白紙はないのか。

授業者：イラストを少し書いてごまかしている学生もいる。このクラスではないが、大人数のクラスではいるかもしれない。

観察者：先生の工夫では、「姿勢」はいいと感じた。3 つのタスクを書いて、授業の方向性を学生に示すのは良いと思った。資料を読むだけではなく、内容を聞いて理解するのに、プリントに空欄を作っては？そうすれば学生が集中して聞くのではないだろうか？なかなか学生が発表しないという問題は、グループにしたら抵抗が少なくなるのではないだろうか。

授業者：ぜひ取り入れたい案ではあるが、以前そのようにした際に、グループ分けするのに時間もかかり、グループの中でディスカッションが難しい。これをなんとかしたいとは考えている。

観察者：繰り返して精度を高めていくということが大事ではないか。

授業者：手を挙げて発表するということが困難なので、発表の前段階で文章にまとめる。しかも、タイトルと内容を書かせているが、なかなか発表しない。はがきサイズがちょうどいいのではないかと考えている。コラム、投稿なら短いので書ける。8 割くらいの学生は結構書ける。

観察者：発表のフォーマットが身につけてないのでは？学生が発表するのを誘導する言葉が必要ではないか。

観察者：指定討論者を決めていて、質問やコメントを何か書くようにしている。授業中に意見はほとんど出ない。穴埋め式の資料を作成しても、これをきちんとやる学生もいるが、それもできないのが多い。

授業者：せめて教材、素材だけは楽しいものにして、ワンポイントだけは伝えたい。アクティブラーニングは、現在形式的なものになっている。共通教育科目ではエピソードに残る事例を紹介したいと考えている。

観察者：この度のストーリーの二人の登場人物が、好奇心とコミュニケーション力を持っていた。学生たちがコミュニケーションを学ばなければならない。今は、4技能ではなく5技能(5つ目の技能はプレゼンテーション)の時代である。学生にコミュニケーション力が欠けていると感じた。

観察者：アメリカでもこの授業をされているのか？

授業者：日本とアメリカの中学校で実施した。たまたまアメリカでは大学生にも授業をした。アメリカの学生は必ず、「because」をつける。見出しを付け、どうしてこう付けたかを話す。今日の学生にも、その「なぜか」を誘導したかった。日本の学生には、こちらから指名しないと発表しない。高校時代に教室の中でリーダーだった学生たちではなかったと思うので、育てていけないといけなと考えている。

観察者：端末で検索をしていたが、いいのか？

授業者：するなどは言わないが、新聞作成では必ず自分の意見を述べるように指導している。なんでもすぐ調べる。そのままコピーしてはダメだと指導している。書く場合は、どのページをいつ見たかを必ず書くように指導している。

観察者：教材について、学生の反応の着地点はどこにあるのか。

授業者：アメリカでやるときには共通点を見つけてというのと、その理由は背景を自分で考える。今日は、むしろ共通点はこのようがあると示したうえで、なぜこうなのかを考えさせた。歴史に関する知識・理解が十分ではないので、なぜなのかを考えさせるようにした。ゼミの学生に対して実践する場合は、別の方法にする。クラスや目的に合わせて使い分けている。

観察者：学生に体験、理解力、想像力がないのでは？

授業者：そう感じることは多い。しかし、それでも丁寧に教えていく。これが今の若者たちなのだと考えている。

第2回授業研究会(第2回 FD研修)

日時：11月29日(木)3限(13:00~14:30)

場所：1号館01203教室

授業担当者 村上 亮 講師

授業科目名：ヨーロッパの歴史と文化2

参加者：村上、大塚、竹盛、Lowes、前田、Tang、記谷、日暮

ヨーロッパの歴史と文化2は、人間文化学部人間文化学科の専門科目である。受講者は60名程度、その大部分を人間文化学科の2年生と3年生が占めている。

今学期の題材はナチである。高校で世界史を履修していない受講者でも「ナチ」や「ヒトラー」、あるいは一般にユダヤ人の大量虐殺を指す「ホロコースト」について、一度は耳にしたことがあるだろう。そのなかで無意識の内に、「ナチ=悪」という構図を受け入れてきたと思われる。また、日本における歴史関係の出版物のなかでもっとも多い主題のひとつはナチであることも間違いない。しかし世界史の教科書やメディアによって描かれるナチやヒトラーは、国内外における最新のナチ研究と

若干の齟齬があることは指摘されていながら、実際の授業には十分に生かされていない。また学術的な裏付けが十分ではないナチ関係の著作が数多く見受けられ、多くの読者を得ている。本講義の念頭には以上の反省点や担当者の危機感があることをまず述べておきたい。

本科目では 15 回の講義を通じて、ヒトラーの政治信条やナチの政策を掘りさげるとどまらず、彼が権力者として台頭するに至った政治的背景を多角的に取りあげている。科目の目的としては、①ファシズムに関する一般的知識を身につけること。②ナチの政策に対する批判的な検討を通じて、歴史的事象を客観的に評価する視座を育成すること。③当時の文献や文書の分析を通じた、史料の解釈能力を習得することの 3 つを掲げた。さらに同時代の映像を積極的に活用することで、メディア・リテラシーの能力を学ぶことも目指していることを付記しておきたい。実際、教員から注意点を示したうえで、ナチによって製作されたプロパガンダ映画『意志の勝利』(レニ・リーフェンシュタール監督)を鑑賞し、そこに仕込まれている印象操作を体感してもらった。なお毎回、授業終了時に感想を書いてもらい、次回授業時に紹介する、あるいはレジュメに掲載する方式で授業を進めてきた。受講生からのさまざまな「声」は授業準備において重要な道しるべとなっており、それはこれからも変わらないだろう。

今回の授業研究では、第 9 回(ナチ支配の現実(2):「国民共同体」の建設を目指して)の講義をおこなった。授業の課題は大きく 2 つに分けられる。第一の課題は、ナチ政権の政策の具体例として雇用政策を、ならびに娯楽提供の例として日本でも知られている国民車(フォルクスワーゲン)の普及策を検討するものである。第二の課題は、ナチが作ろうとした「国民共同体」から排斥されたユダヤ人に対する政策の分析である。これは、後のホロコースト(第 11 回の講義で取りあげた)につながる内容となっている。授業では内容に関わる映像資料として、NHK『映像の世紀第 4 集 ヒトラーの野望』をまず提示したうえで、それを批判的に考察する方式で講義を進めた。第一の課題については、①ナチ政権の「功績」と考えられてきた失業対策の「成功」は、政権側の操作によるところが大きいこと。②映像資料では国民車の普及が進んだように受け取ってしまいかねないが、実際には車は人々の手にはわたっていなかったことを示した。第二の課題については、ナチ政権の一連の政策がユダヤ人の権利を段階的に奪い、国外追放に追い込むことを目指した一方、欧米各国においてはユダヤ人に救いの手がほとんど差し伸べられなかったことに言及した。



第 2 回授業研究検討会まとめ

日時：11 月 30 日(金) 12:15~13:00

場所：学修支援相談室(1 号館 01322 室)

参加者：村上、大塚、中尾、竹盛、Lowes、前田、Tang、日暮

授業者：授業を見てもらうのは採用面接時の模擬授業以来で、撮影されるのも初めてだった。はじめは堅かったかもしれない。大体いつも同じ形で授業をしている。基本的にはテーマを示したうえで映像を見て、授業の内容を進めていく。ナチは私の専門分野ではない。それでもナチをテーマとして取りあげた理由は、学生がなにかしらナチスとかヒトラーの話を知っているとと思われるので、比較的取り掛かりやすいと考えたからである。

観察者：映像の教材が対応されていてよいと感じた。学生は、授業の全体の位置づけが理解できているのであろうか。最後にまとめとして全体を見せて、今日はここだを見せていたが、むしろ最初に見

せたほうがいいのではないかと感じた。それから、説明のスピードが速すぎないか。あのスピードで、頭に入る学生は少ないのではないか。まったく学生とのやりとりや質疑応答はされていないが、学生の立場からの質問のようなことを話されていたが、実際に聞いてみてはどうだろうか。

授業者：もう少し人数が少なればできるのだが、60人では難しい。一度試してみたが、難しい。用紙に質問や意見を書かせているが、それをあらかじめチェックしておいて、あらかじめ質問を想定しながら、こういう質問がでてくるだろうと予測しながら話している。

質問があった点については、次の授業の中で補足の説明している。レジュメに掲載している参考文献については、実際に借りに来る学生もいる。

観察者：情報がたくさんあった。最後のまとめのスライドはよいと思った。それは時々見せたらいいと考える。昔の話と今の話に置き換えたりできる。それはアクティブラーニングができる。それは学生が覚えやすいのではないか。

観察者：現代の政治状況を重ねるといえるのではないのか。

授業者：確かに、導入のところでは、授業の狙いは、日本ではナチスカルチャーが身近にあることを念頭にあることは説明しているが、今はもう覚えていないかもしれない。

観察者：日本の現状を説明すると、それを話し出すと…ということはあるのだが。

授業者：ナチスの状況を踏まえて日本の政情を取りあげることで学生に影響を与えることは、あまりよくないのではないか。

観察者：出しすぎるのはよくないが、繰り返して説明することは必要ではないか。

観察者：面白い内容であった。中身も豊富であった。簡単な質問を出すのはどうだろうか。ABCの選択とか簡単なものでも、少し楽になるのではないか。大きいグループでも小さいグループでも簡単な質問であれば、学生も集中力があがるのではないか。せっかく映像があったので、その感想を終わったところで話し合いをさせてみる。内容の確認もできる、どのように理解できるかというのもいいかもしれない。

観察者：アクティブラーニングもいいが、先生のやり方でいいのではないか。

授業者：受講者が100人以上いたり、さまざまな学部の子がいる場合にはなかなか難しい。そういうところでやると難しい。人数がもう少し少なければ、学生と話もできるのだが。クイズのようなもの、感想を何かかけるような工夫もいいかもしれない。

観察者：それも、学生とのキャッチボールである。

観察者：みんながアクティブラーニングをする必要はない。こういう深い内容の授業も大学の講義である。講義の中でナチスの支持はなかったという説明があったが、それはなぜかという説明があった方がよかったのではないか。ポイントについては、もっと詳しく、大学の講義とはこういうところまでやるということを見せても良かったかもしれない。研究者はどう立証したのかを説明するのが大学の講義ではないか。

観察者：ナチスは、カリスマ性はあったが、みんながみんな賛同しているわけではない。一人一人の心理には興味がある。

授業者：ナチス研究自体が近年変わってきている。できるだけ新しい研究を取り入れながら、歴史研究と教科書に乖離があるということを学生に説明している。踏み込んだ感想が出てくるのは受講者の2割5分にすぎず、簡単にしか書かない学生が多い。半分くらいの学生にもっと書いてもらえるように試行錯誤している。

観察者：作られていた歴史から見ていたものが、人民の方から見たもので見直され、再構築されてい



る。一過性を見ているのかもしれない。100 年後にはまた変わっているかもしれない。

観察者：政治信条とか話さざるを得ない。それが現代でもある。投票率など少し関係することを話して、注意を持たせる

観察者：学生自身がそこから考えることである。

観察者：今もそうだろうかと考えてくれるように、誘い水をしてやる必要があるではないか。

観察者：最後の提出シートにそういうことを書く学生はいるのか。

授業者：ときどき考える手がかりの一つになったと書いている学生もいる。2 週間前にはナチの宣伝映画を見せた。そういう子らは、自分で本を読んだりしている。しかし、そういう学生が少ない。まだ模索している状況である。

観察者：アーリアン、イランとユダヤというのは中近東では近いところにある。ヨーロッパ北部に移住したアーリア人はゲルマン民族となり、<血>の繋がりという強い結束性で動いてく。純血種を重んじ、異種を排斥するという流れが、できていったように思える。原点に帰れば、同じような場所に住んでいたのに。ところでゲルマン語の kind は「生まれる」「同じ類への温情」、「類」という意味が重なり合う。イギリスの古い文学、『ベオウルフ』を見ても、家族や部族を守る血の結束性が一つのモチーフである。ナチの生きざまは、このような文学の座標においてみても、興味をそそられる問題である。

観察者：テンポがよく、楽しかった。学生を楽しく引き込める講義ができたらいいい。話の中で、前の講義に戻るタイミングがあったが、その時に、ビジュアルで見せてもらったほうがいいと感じた。

授業者：いろいろ入れすぎているのではないかと感じている。普段は講義で話す内容を記したメモを手元においている。全体でどこまでやるかというところはあるが、工夫をすれば、そんなに量を減らさず、学生に集中力を欠かすことなく授業を進めることが可能かもしれない。今日指摘された内容は、今後の授業の改善になる。

観察者：少し間(ま)をとってはどうか。要所要所のところで止めて。

観察者：あれだけ充実した内容の授業の準備をしているのは大変評価できる。そのうえで、一つ学生に考えさせるところがあってもいいのではないか。

授業者：『映像の世紀』への批判は、ドイツ史の研究者が言い始めた。実は通説的に聞いていたことと実際は違うのではないかと指摘された点をこの何回かの講義でやっている。ナチス研究は現在においても進んでいる。

観察者：『武士の一分』をアメリカのアニメーション会社が音声のみ翻訳し、それが起点となって、邦画とアメリカ版の比較研究がおこなわれている。あきらかにとらえ方が違うのが分かる。日本語版では言葉の濃淡と間(ま)が微妙に取られ、武士とは言え人間のむしろ弱さが強調されているが、英語の吹き替えでは、まるで武士の英雄像を浮き立たせるように、強さが強調されているように見えた。

観察者：大学の教育というのは、事実の面白さで引き付けるものだと思う。そういう意味では非常にいい授業であったと思った。

第 3 回授業研究会 (第 3 回 FD 研修)

日時：12 月 8 日 (火) 5 限 (16:20 ~17:50)

場所：1 号館 01204 教室

授業担当者 竹盛 浩二 准教授

授業科目名：教職実践演習

参加者：中尾、劉、地主、記谷、山口、日暮

この授業「教職実践演習」は本学教職課程の中で最終段階に位置付く科目である。中学校高等学校の教員の実践力について、「教員としての使命感・責任感・教育的愛情」、「教員としての社会性・対人関係能力」、「生徒への理解力と学級経営」、「教育内容等の指導力」に関する4項目からそれぞれの修得状況を総合的に検証する。教育実習を経て得られた成果と課題も省察しつつ、教員免許状を目指す学生に対し、その資質・能力について、最後の見極めを行うものである。今回はその第10回、「教員としての使命感・責任感・教育的愛情についての探求」が主題である。第6回から9回までの4回分は、3人の現職教員を含む外部講師に担当していただいている。現場の実情に合わせた実践的な学修が組織された。



教育再生会議の第七次提言「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について」（平成27年5月14日）がある。そしてそれをうけた中教審答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（平成27年12月21日）がある。その中で、今日、全国的に各県等において「教員育成指標」が策定されている。そこには、教員採用時に求められる資質能力が示され、またその後の経験と各種研修を経て、段階的にどのような教員を目指すべきなのかについての、詳細な指標が示されている。教職を目指すとなれば、この状況が学生たちを待ち受けている。大学の教職課程は、とりわけ「教職実践演習」においては、このことを見通しておかなければならない。

授業のねらいは、授業の主題であるところの、教員としての「使命感」「責任感」「教育的愛情」に関して、ビデオ視聴によって視覚的にも思考と感性に訴えながら、国語教育実践家、泰斗大村はまの著作からその言葉を考察し、学生を、自らを問いただす位置に立たせてみようというところにある。

教材は、大村はま（明治39年～平成17年）である。大村はまの授業の実際、その経歴、その教育思想が凝縮されていると思える動画映像3カットを、NHKビデオ「大村はまの世界」（VHS）と大空社「大村はま 創造の世界」（DVD）から抽出編集した（計16分）。著作では『教えるということ』（ちくま学芸文庫）から「教師の禁句「静かにしなさい！」」、「「子ども好き」だけではダメ」、「禁句「わかりましたか？」」の3篇、『日本の教師に伝えたいこと』（ちくま学芸文庫）からは「いきいきとした教室とは」、「研究する教師」の2篇の文章をもってプリント教材化（A4、6頁）するとともに、この他にこの2冊中の「信州の教育的風土のなかで」、「仏様の指」、「ふたつのエピソード」計3篇の文章を別途、抽出・朗読することとした。

授業展開は、ビデオ視聴を挟みながら、大村はまの文章全8篇の、全て授業者の朗読（40分）を聞いて、学生は考えることを記述し、その交流を図ろうとするもの（計20分）であった。

何故、大村はまなのか。教職実践演習において、この授業の今回のテーマを論ずることのできるの、ひとり大村はま、だけではない。しかも、大村はまは不世出の国語教師。時代的にも古びた実践家で、現代の学生には程遠い存在である。しかしながら今回のテーマを追究するには、大村はまをもってするのが、本質的に最適であるという授業者の判断である。

問題は、教師としての使命感・責任感・教育的愛情について、単なるお題目、単なる知識ではなくて、学生の心の中で今の段階でそのテーマに関し、大村はまの思想を理解し、それに共鳴できるかどうか、それが言えるだけの自分自身の問い直しが大切である。拒否反応を示しても良い。それだけの、その反発力を、しっかりと持って欲しい。もちろんのこと、現場の教師でさえも、大村はまを受け入れられない者が多い。教職にある者の、立ち位置がそうさせるのであって、その位置を自覚することで改めて己の責任感を確かめるのであれば、それはそれで主体的なありようである。学生にこれを求めるのは難しいかもしれない。しかしながら、それぞれの内部でざわめきながら生じる拒否反応を相

対化し、問い直すことを始めてほしいのである。

授業の終盤で、大村はまを読んだ後で感想を書き、「大村はまの考えを理解し、受容できるかどうか？」という問いかけに、多くの学生が「いいえ」と回答するに違いないと授業者は予測していた。理解はできるが、出来そうにない、そう感じる学生がほとんどではないかと思っていた。そうであってほしいと思っていた。結果は、予想を裏切るものであった。出席 32 名中、「いいえ」は 1 人だけ、ほぼ全員が「はい」である。もっともっと、自分の考え、自分の感性を大切に、発揮してほしいと思うのである。それにしても、大村はまが言うように、「わかりましたか？」に対しては「はい」しかないという、教育の現場における定型が、奇しくもここでも見られるのである。この澱みを、さてどのように解消することができるのだろうか。思考と感性のこのような停滞が、いかなる事態に至るのか、歴史は繰り返している。

しかしながら、一人一人の感想をつぶさに読めば、手放しで「はい」というわけではないということが分かる。大村はまが言う「禁句」に随分の学生が反応しており (47%)、大村はまの単元学習に興味を示す者も多い (42%)。残りは「引き続き考えていきたい」の類であって、容易に結論など出そうにないテーマであるということでありそうである。確かにそうである。「はい、よく分かりました」であるはずがない。そういうテーマが、この授業のテーマ「教員としての使命感・責任感・教育的愛情についての探求」であるのであった。そういう意味では、学生の心を揺さぶる、そのための教材として大村はまは機能したのではないかと思われる。

授業技術について言えば、上述の、学生個々の受け止めにこの授業中に如何に交流させるかということがある。ICT を活用し、Cerezo を利用して感想の要約を入力させ、先述の「はい・いいえ」の回答を求めた。それを瞬時に PC 上で集計・グラフ化して提示し、匿名化したうえでそれぞれの要約記述をスクリーンに映しながら、ある程度交流ができると授業者は踏んでいた。ところが、学生はスピーディーに回答対応してくれたのであるが、授業者の中に抜かりがあった。スクリーンにそれが映らないというトラブル (授業終了後には解決)。口頭でのやりとりに切り替えて、その場をしのいだが、その点は悔やまれるところである。しかしそれは、むしろ予定が狂って、いうならば古典的方法をとったからこそよかったのではないかと、とも思う。ただそれは、技術的に克服できてから言えることではある。ともあれ ICT 機器利用に関し、熟練の必要を痛感した。だが、要は、学生の意見を個々の内に留めるのではなく、学習集団として交流ができてはじめて、それを共有することができる。その重要性を改めて考えることとなった。

最後に、次に示すのは、一人の学生が書いた感想である。

【考えたこと】教師になる動機として、「子ども好き」だけではいけない。子どもに好かれて子どもと幸せに暮らしているだけの職業なのか。そうではなく、教師とは「子どもを一人で生き抜く人間に鍛えあげること」である。この話がとても響いた。教師は授業を通して知識を与えるだけではなく、一人の人間を独立に向かって育てることをしないといけない。そう感じた。そして、子どもができない理由を子どもに原因があると考えるのも違う。やり方を間違えているのかもしれない。自分を見つめ直す必要があると思った。ベテランも新人も、生徒にとっては同じ先生。甘えは許されない。

【要約】教師とは、「一人で生き抜く人間を鍛えあげる」職業。生徒に対して謙虚な気持ちで向かい、自分のやり方を過信しない。

今回の授業がどういうところに学生を導こうとしたのか、それがどの程度達成できたのか、その一端を窺うことができるのではないかと。

第3回授業研究検討会まとめ

日時：12月9日（水）12:15～13:00

場所：学修支援相談室（1号館 01322室）

参加者：竹盛、中尾、劉、地主、記谷、山口、日暮

授業者：今日の授業は「教職実践演習」第10回であった。授業計画は、配布の資料の中に示してある。この授業を経て、教職を目指す学生に最終的に免許を出せるかどうかを見極めるものである。直近の4回は現場の先生に来ていただいて実践的な事例をもとにアクティブな学習が組織されてきた。最初の3回は教育実習のリフレクション、最後の3回は再度の教育実習の授業再現にて終了する。

本時の「大村はまの考えを、理解・受容できますか」という問いかけは、実際に教職に就くかどうか定かでない学生が多い中で、それ程追い詰めるべきでもないかと思ひ、ずいぶん中途半端な問いとなっている。それが、ほとんど「はい」という結果になった要因かもしれない。しかし、学生の記述を読むと、反応は結構多様で、「禁句」に反応した者、「授業形態」に興味を示した者など、様々である。なかなか難しいので、これからも考えていきたい、という者も1割いた。

今日は、大村はまを取り上げた。現場の教員でも、大村はまのようにできない、という声が多いということも承知している。それに照らせば、今日の学生の「はい」回答は、多すぎる。反発する力、抵抗する力というものが、学生に備わっていないと考えられるのか、どうか。

授業で学生の反応結果をスクリーンに映そうとしたのだが、うまくいかなかった。失態である。いま回覧しているものが、映し出そうとした表やグラフである。

観察者：なぜ大村はまを取り上げたのか。この人は戦前からの人で、翼賛教育も経験し、その反省から生まれる大村はまの考え方を学生に提供したのには、何かねらいがあったのか。

授業者：教育的愛情とか責任感とかいうことが、それ程簡単なものではないことを踏まえ、学生が様々揺り動かされる中で、考えていってほしいからである。このテーマに関しては、毎年試行錯誤を繰り返している。毎年、扱う素材や方法を工夫しているが、定まらない。永遠の課題であるとも言える。

観察者：現実の教師は、理想との間で常に揺れ動いている。大村はまは巨人である。すべての教員がスーパーマンであろうとしても、なれはしない。物理という教科でも、大村はまの言うようにはならない。週休2日制になり、教員の聖職論だけでは教員は病院送りになるだけである。大村はまの理想論は、否定はできないが、なかなかできるものではない、と思う。

授業者：すべての時間を教材の発掘と研究に充てて、大村はまは大村はまになった。ビデオにもあったように、図書室での授業であったが、そのような特別な環境があって成り立っている。特別な援助を受けている。その真似は、なかなかできるものではない。

ところで、学生の中では、教育実習でアクティブラーニングができた、できなかった、とは言う。アクティブラーニングやコミュニケーションというものを、学生ははき違えている。その本当の姿についてわからそうと思えば、なかなか真似はできない大村はまによるしかない、とも言えるのではないか。

観察者：今回の大村はまの生き方は特別で、ああいふ恵まれた環境で、しかも生徒が都会のモデル的な子どもである。私は、田舎でまったく違う世界で、教員として生徒の前に立ってきた。そこでは、



様が大切である。生徒は、集団・社会の中の一員である。学校は集団である。集団の中の一因は、社会の中の一員であるということを考えさせてきた。これが許されたらなにが許されるのかということテーマにしてきた。そこから見れば、今日の授業では、大村はまの、あのような世界があるのか、と思っている。

広島県では、「主体的で対話的で深い学び」を必死に展開している。アクティブラーニングも同様である。ともあれ、いろんな生き方を生徒に見せることが大切である。先生が勉強しない教師では、生徒は勉強しない。今日の授業では、学生もいろいろ考えているということが分かった。

授業者：学生をどう捉えるのか。教育の理念を学生に説くにあたり、異論はあるかとも思うが、大村はまの力を借りようとした。

観察者：教育現場において、あるいは学生実態において、今日のテーマをもって教育実践演習を教えることは困難が伴う。以前、教職実践演習を担当したときには、子供の家庭生活やバックボーンを踏まえ、事例を聞いて、そこから先生は学ばなければいけない。

授業者：事例をもとにという話は、外部講師の先生には具体的に話してもらっている。

観察者：いろんな人の話を聞かせることはできる。

観察者：教職実践演習は、いろんな人がいろんな角度で話をしている。学生に一面からではなく、迷わせていく。迷うということが考えていく一歩ではなかろうか。受容できる、「はい」と書いたかもしれないが、心持ちはどうだったであろうか。学生の立場であれば、はっきり「はい」とは、ちょっと言えない筈だが。

観察者：内容について、素晴らしいと思った。教師を目指している学生ですよ。

授業者：37名が履修している。まずは、教員免許状をとることを目的としている。

観察者：自分が教師になるために、一つのモデルとなる。いろいろな現場に立ってから、ブレがあると思うが、人生には大きな目標を持つことができるのではないか。大村はま先生の考え方は素晴らしい。クラスの雰囲気がよかった。

授業者：いや、一人は寝ていたし、一人はずっと喋っていた。「起きなさい」「静かにしなさい」とは言っていない。

観察者：教材の機械の扱いは良かった。また、最初の学生の発言はいいと思った。学生に質問した時に、学生が自分の主張を言う、そういう学生がいるのはいいと感じた。質問の仕方、意見の引き出し方が上手だった。

観察者：私自身、デンマークの文法学者イエスペルセンが、さよなら講演(Farewell Lecture)で、人生というのは、ささいな出来事の積み上げだ(Life consists of little things.)と言った。その小さなことをいかに大きくみていくかが大事であると。これはただ単に、言葉を活字レベルではなく、迷いながら疑ってみてほしいということであるだろう。迷わない限り、今日のテーマで言えば、「使命感、責任感」を学生は説明することができない。今日の授業はあくまできっかけであって、迷わない限り答えは出ない。この問題は、教員としてだけではなく、社会人としてというところまで広がっていく。結論ではなく、考える出発点である授業だったのではないだろうか。今は、あくまで第1次的な理解である。第2次的な理解は、自分はどう生きていくかである。それを考える、第一歩となったのではないか。

授業者：「職業は人生だ」と大村はまは言うが、現代の学生は職業がなかなか「自分のもの」にはなりにくい。この時代、時代は、教育現場は大変である。

観察者：教員の理想論として否定はしないが、大変である。

授業者：大村はまに感化されて、教師をやってきた。

観察者：「教育的愛情」という言葉だが、教科を通して、単なる愛情ではなく、教育的愛情という言葉は大事であると感じた。単に子供に愛情を注ぐことではなく、しっかりした授業をやることだ。教科を通して生きる学力を付けること、先生はそれだけの広がりを持って教壇に立たなければならない。見通しを持ちながら、学力観を持たないといけないと感じた。教育的な愛情とは、教室の中で教員は、自分の学力を鍛えるということなのではないか。

授業者：困難なことではあるが、これは追いもとめていかなければならない。

観察者：学校に行くといろんな先生がいる。ワンパターンではないと思うが、大事なことはある。

観察者：人間みな、考え方が違う。しかし、共通して「生きる」という原点をきちんと支えていかなければならない。そして、いろいろな人間がいる。

観察者：それは生活能力としての「生きる」なのか。

観察者：まず、学校の中で、「生きる」力を身につけることが大切である。学校の中での様々な取り組みがある。

授業者：大村はまは、まずは国語という教科の中で、「生きる」ための言葉の力を考えている。

観察者：授業評価ということがあるが、今日の授業は、そういう規準ではなかなかすくい取れないものであった。